

Saudade (サウダーヂ)

野 田 和 人

奨励者紹介[のだ・かずひと]

日本キリスト教団神戸栄光教会牧師

イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。

平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。

(マタイによる福音書 5章1―2、9節)

一番好きな言葉

私が現在勤めています神戸栄光教会には、メソジスト教会の伝統である、教会のメンバーの居住地域別の集まり、地域別家庭集会としての組会が六つありますが、ある組会での聖書講解の後の懇談時に、出席者が読書感想をお話するという機会がありました。

私はその時、元 THE BOOM のヴォーカリストだった宮沢和史さんの新曲、“Paper Plane”（作詞作曲 宮沢和史）という歌をよく聴いていて、そこでは「キリストが見下ろす街まで 旅に出よう」や「エイサーが躍る島まで 海を渡ろう」などと歌われており、「ああ、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロと沖縄のことだなあ」と大変懐かしく感じていました。そこで、彼が音楽雑誌『月刊ラティーナ』に3年間連載したエッセーをまとめた『島々百景』（宮沢和史 ラティーナ 2019年）という本に目を通し、その中のエッセーの一つ、「サウダーヂとは」を紹介する形で、その読書感想を述べました。

私は最初の大学を卒業した後すぐに、そろばん教師としてブラジル・サンパウロへ渡り、そこで日系人の女性と結婚して15年程過ぎました。宮沢さんもブラジルや沖縄に大変強い思い入れのある方ですが、皆さんはたとえば「日本語で一番好きな言葉は何ですか」と聞かれば、どう答えられるでしょうか。同じような質問に、多くのブラジル人は、そして私も、今日のメッセージの題名、ポルトガル語で“Saudade”（サウダーヂ）と答えます。

サウダーヂ

宮沢さんによれば、“Saudade”（サウダーヂ）とは「もう戻れないかもしれない場所への郷愁。二度と手元に戻らないかもしれない物、会えないかもしれない者への愛惜の思い」ということですが、他の言葉で表現すると、英語では少し軽い印象を受けるが“miss”、そして“Nostalgia”。ノスタルジアは、辞書的な意味ではサウダーヂに近いが、その原意を調べると驚くことがあったと言います。「この言葉の語源はギリシャ語の`nostos（家に帰る）`と`algos・algia（悲嘆、心の痛み）`という言葉をつづけてスイスの医師ヨハネス・ホウファー氏が1688年に生み出した造語だというのが。その時代の不安感、不安定さ

から沸き起こる人々の憂鬱な心情を表そうとした言葉で、のちにこの感情は歴とした病であると認識されるようになっていった。戦における兵士たちのこれから起きるであろうことへの不安、ストレスが感情の苦しみを生み、心の病となると精神病理学的に分析されたのだ。(中略)20世紀の手前頃には精神病理学的な病としてこの言葉を捉えようとはしなくなっていく。(中略)それからは現代で使われているような『過去や故郷を懐かしむ』という使いやすい慣用句として用いられるようになったわけだが、もともとは合成語であり病の名称だった」ということだそうです。

しかしそこで大切なことは、ただ単に過去を懐かしむのではなく、過去を見直し、過去から学び、その過去から投影される未来を積極的に形作っていく作業を継続していくことではないか、と宮沢さんは語られます。この「過去から投影される未来を積極的に形作っていく」という意味での“Saudade”として、私自身聖書から想起した言葉が、今日お読みした、イエスさまの山上の説教の中の一節「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」だったのです。

平和を実現する人々

この言葉の直前にある「憐れみ深い人々は、幸いである」の「憐れみ深い人々」とは、「本来自分の内にはない、神さまの憐れみが働く場としての赦しの場を、神さまの憐れみによって自分の内に用意できている人々のこと」であり、また「心の清い人々は、幸いである」の「心の清い人々」とは、「私が全く何からも妨げられずに、神さまが与えてくださる清さを、すべてがキリストのものである清さを、私のためにその命を与え尽くされたキリストの献身をそのまま受け入れる人々のこと」です。

同様に、今日与えられた御言葉である「平和を実現する人々」も、決してパクス・ロマーナ(ローマの平和)やパクス・アメリカーナ(アメリカの平和)といった、力で支配する平和のために働く人々を指しているわけではありません。それらは結局、敵意や憎しみを生み出すだけですから、そうではなく、人が壁を打ち立てようとする所に橋を架けるという本来私の内にはない神さまの平和が働く場を、神さまの憐れみによって自分の内に用意できている人々について語っています。

心の貧しい人々

それでは、一体誰がそのようなことができるのでしょうか。

すべては、イエスさまの山上の説教の最初の教えである「心の貧しい人々は、幸いである」へと結びついていくように思います。

ここでの「心の貧しい」とは、意気地がないことを言っているわけではありません。そうではなく、その人を形作っているすべてのものが、存在するすべてのものの造り主であられる唯一の神さまに向けて開かれていることを表しています。

私は、私自身の持ち物や誇り、プライドでもういっぱいになっていて、それらで私が閉じられているのではなく、私のすべてが私を造ってくださった神さまのものとして、その神さまへ向けて開かれ、そこに主なる神さまの命の息が吹き込まれて身も心も豊かに満たされるということ、これがイエスさまの語られる「貧しさ」です。そしてそれは私たちの大好きな自己主張、「自らを誇ること」から最も遠く離れたものであり、私たちの生きる視座を神さまと隣人とに向けるものと言っていいでしょう。

この意味でイエスさまは最初の「貧しい人」でした。イエスさまはすべてのことにおいて、十字架の死に至るまで、ご自身を父なる神さまに向けて開かれたからです。その結果として、今日お読みしたイエスさまの山上の説教に記されているイエスさまの教えは、ナザレのイエスにおいて実際に生き抜かれ、明らかにされたのでした。

「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた」（コリントの信徒への手紙二8章9節）。主が私たちのために貧しくなられたのは、その主を通して神さまの思いが、神さまの意志が私たちに働き、後にすべての人に注がれ、私たち一人ひとりが隣人を自分のように愛する者として、隣人も私と同じく神さまによって造られ愛されている者として愛する、そのような者として、すなわち「平和を造り出す者」「Peacemaker」として生きるようになるためでした。

ピースメーカー

イエスさまの語られる「平和の創造」は、私たちがどうしてもそこへと傾きがちな、傲慢や偏見からくる差別、分断や排除によってなされるのではなく、私たちが互いの間に距離を置くことから訣別することによって成り立つものです。そしてそれこそが、私たちが敵意や憎悪、また武力によって私たちの間に距離を置くことから、あらゆる手段を用いて訣別することこそが、神さまの前にすべてを明け渡した「心の貧しい者」、すなわち自らのすべてを明け渡したところで主の平和に生きるあなたたち「神の子」の来るべき姿なのだと、今日の御言葉は私たちに訴えています。

そうです。平和は、「過去を見直し、過去から学び、その過去から投影される未来を積極的に形作っていく」力であるということです。私たちはここにノスタルジアではない“Saudade”（サウダーヂ）を覚えるのではないのでしょうか。

絵本作家の浜田桂子さんが著された『日・中・韓 平和絵本へいわって どんなこと?』（童心社 2011年）という絵本があります。この本の最後に次のように記されています。「へいわってぼくが うまれてよかったって いうこと」（同 34 頁）。「きみがうまれてよかったっていうこと。そしてね、きみとぼくはともだちになれるっていうこと」（同 36 頁）。

互いの間に距離を置かないということが本当に大切だと思います。私たちは、かつて、今も、そしてこれからもそのように造られているということ、たとえそちらに向かなくとも、そこへ向けて造られているということ、これが“Saudade”です。

祈りましょう。

神さま、私たち一人ひとりを、お互いに向けて互いの平和を造り出す者、“Peacemaker”としてください。今日一日のすべての業の上に、あなたのお導きと祝福が豊かにありますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

〔参考文献〕

宮沢和史 『島々百景』 ラティーナ 2019年

2020年 11 月 11 日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録